

ほど美しい。こんな秀れたものを、外国人から隠しているのは、フェアーではない。」とこんな調子で怒るのである。

日本人は鹿鳴館にみられるように、西欧文化に対しては、積極的にこれを取り入れて、見事に西洋化を成しとげた。しかし、自らを他民族へ説明したり、自国文化を知らせることについては、まったく苦手であるし、臆病である。西欧を師と仰いできた伝統から、西欧文化だけが世界で普遍性をもったものだときめこんでおり、日本文化は特殊であるから、到底異邦人にはわからぬ確信しているようである。経済大国にまで発展した今日、そろそろ鹿鳴館精神から脱却して、西洋一辺倒ではなく、さりとて、唯我独尊でもなく、相対的に多種多様な文化について認識を深め、自らの文化についても、気負わずいじげず、爽やかに語れるようになりたいものである。

昭和二十五年大学文学部英文科卒業。
(財団法人 民族学振興会千里事務局長)

同志社校地出土の埋蔵文化財

鈴木 重治



亀形座鈕双鶴南天文蓬菜鏡
(室町時代、田辺 Loc. 3 出土)

同志社の田辺校地には、弥生時代の竪穴住居址群が発見された「田辺天神山遺跡」をはじめ、横穴式石室を残す「下司古墳群」などこれまでに十六ヶ所の遺跡が確認されている。

ここに示す和鏡は、田辺校地第三地点遺跡の中世城館の土塁中から、一九八〇年二

月二十九日に出土したものである。

径五・一釐を測る鏡面には、緑灰色の錆がひろがり、部分的に木炭の細片が付着している。鏡背の文様は、中央の鈕に上向きの亀を置き、左右対称に配された二羽の鶴が、その上部で首を屈曲させて向い合い、翼をひろげて足を伸ばし、空中に舞いながらともに嘴を亀の口に接して、均整のとれた上半部の文様を構成している。下半部にみられる草文は、風になびく南天をうかがわせ、左右に振り分けられた細い茎態を示している。亀甲や鶴の羽根、南天の葉脈などの細部文様にいたるまで、鑄上りは良好であって、小型の亀形座鈕双鶴文蓬菜鏡の出土品として稀有の例である。

この銅鏡に伴って出土した資料には、菊花の印花文を体部外面にめぐらせた素焼の香炉や土師皿、中国製の青磁、白磁、青花などの碗、皿があり、すべて室町時代に属している。

なお、これらの考古学的にも重要な一括資料は、同志社資料館収蔵庫で保管されている。

(同志社大学校地学術調査委員会調査主任)